



～「どうすれば認知症の人への虐待を止められるか」に参加して～

3月18日(日)、「虐待」研修に参加した。講師の林田俊弘氏は、ご自身の施設で実際に虐待を体験され《鼻めがねという暴力～どうすれば認知症の人への虐待を止められるか～》という本を出された。自分の施設で起こったことが世の中で繰り返されてはダメだ、という強い信念から、赤裸々に語ってくださった。

講義を聞くまで「自分は虐待なんかやらないよ」と思っていたが、講義冒頭『虐待は、自分には関係ないと思った瞬間から巻き込まれる可能性がある』と言われ、「あらら」と少し動揺してしまった。

自分が虐待しようと思ってするのではなく、知らず知らずの間にやっちゃっていることがあるということ、殴る蹴るだけが虐待ではなく、利用者さんが望んでないことをやらせてしまっていることも含まれる。パーティーグッズの鼻めがねや三角帽子、利用者さんが進んでつける、あるいは楽しんでいる、喜んでいる場合は何の問題もない。しかし「ワーかわいい」と職員たちだけが喜んでいる場面や、ウケを狙う、ノリで行う…。恥ずかしい話、自分にも思い当たるところがある。

講義の中で、虐待が起きる原因は「相談できない職場環境にある」と話されていたが、これが一番大きく心に残った。相談できない弱い立場だった場合を想像すると、ストレスの解消を弱者(利用者)に向けてしまう恐れは大いにあり得ると思う。

自分は40代後半でこの業界にデビューしたが、やること全てがうまく行かないことばかり、時間内に仕事が終わらないのは自分の経験の無さ、技量の無さだと思い、人に相談することを迷った時期もあった。多くの方は「そんなこともできないのか」と思われたくないの言葉にできないそうだが、自分は歳をとっていたので、ずうずうしく質問・相談できたし、一緒に働く人たちが助けてくれた。

職場環境が雑然としていることも虐待が起こり得る要因のひとつであるという。掃除が行き届いていない、消耗品を切らしたまま。入浴介助中に石鹸やシャンプーが切れていると、「あ一時間が足りなくなるう」とイラッとする。以前勤めていた会社で、当時の上司が「『次工程はお客様』だと思って仕事をしろ」と叱られたことを思い出す。当時は「ハア？」と思っていたが、今この仕事をしてようやくその意味がわかった気がする。「お客様だけじゃなく、社内の人にも同じように丁寧に仕事をしなさい。次の人が気持ちよく仕事ができるように気配りをしなさい」という意味なのだ。次のスタッフがスムーズに入浴介助ができるようにシャンプーが残り少なければ補充しておくなど、細かいことを積み重ねて行く、小さなことでも質問・相談できる環境であることが虐待の芽を摘むのではないだろうか、と感じた。

(ケアサポートえん・まどかスタッフ／佐藤豊)